



Title	保健婦業務の今昔 : 保健婦業務の問題点
Author(s)	杉本, 智子
Citation	大阪公衆衛生. 1967, 19, p. 9-10
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/84417
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

保健婦業務の今昔

保健婦業務の問題点

杉 本 智 子

こんな地区で

保健婦業務とは保健指導がその中心であることは、今も昔も変わらないと思います。そしてその目的は大きくいえば地区住民の健康の増進であると思います。目的は同じでも市町村、国保、保健所等所属するところにより業務内容はかなり異っているようです。また、保健所の管轄する地区の特色（例えば山間部、都市部等）によっても多少異っています。

つぎに私の勤務する守口保健所管内の状況を述べてみたいと思います。保健所の型は U₂型で府下では大阪市内中心部に最も近く、管内の守口市門真市は松下電器、三洋電機の大企業を除いて多くは家内工業的な小企業の街であります。特に門真市は昭和38年に市制がひかれてから、新興都市として社会的人口増加が著るしく、出生率も39という高率を示しています。また蕪池地帯であり住宅地に適さないとして最近までとり残されていた地域であり、住宅難の現状と相まって昭和37年ころから、急造の埋立地帯に安負請のアパートや文化住宅群が建ち並び、畳や寝具の湿気が強い、蚊やゴキブリ、ナメクジが多発する等環境衛生的にも多くの問題を有する地域があります。

これらの特色をもつ地域を受持ち、保健婦一人が「住民の健康を守るために」とどれだけ力んでみても何ら行ない得ない状態です。

つぎに時間別の業務内容について述べますと、家庭訪問30%、所内外クリニック16%、保健婦事務10%、記録8%その他業務となっています。家庭訪問はその約80%は結核に費やされており、ついで未熟児妊産婦その他となっています。

仕事はふえる一方

結核業務について述べますと管内人口は約25万で、うち結核患者は45年度末まで約3,700人となっており保健所保健婦7名と国保保健婦2名で受持っています。近年ガンの増加に伴ない結核はもはや問題視されない疾病として忘れ去られようとしている感がありますが、現実にはこれだけ多くの患者がおり年々新発生をみている状態で、私たちの勤務も依然として結核患者の訪問にその主力を注いでいる現状です。また、予防法の申請をして後2か月2か月で転出してしまい、転出先不明のまま放置するcaseも多く管理の面で充分

いま 保健婦

でない悩みは都市の保健所であれば、どこでも同じであろうと思われます。このように結核患者の管理すら満足に行ない得ない状態で、社会状況の変化に伴い精神衛生業務等々業務は増える一方です。

母子管理については、守口市、門真市の昭和40年度の年間出生数は約6,700人で、クリニック所内所外あわせて来所者は年間出生数の約80%となっています。乳児は、出生届から管理票を作成するのがやっとで、実際の管理は及びもつかない状態です。乳児の訪問は連絡票により新生児は地区の助産婦に委託し、未熟児は保健婦が訪問指導していますが、届出も少なく、早期に適切な指導がなされているとはいえません。乳児クリニックは所内週2回、所外12ヶ所にて毎月実施していますが、来所者が非常に多く、保健婦はいかに早く人をさばくかに追われ、十分な指導も出来ない現状であり、内容的に少しでも充実したクリニックにするために検討がなされています。

都市においては、医療機関が発達し地区の開業医で健康相談の行なわれている所もあり、各メーカーその他の地区進出、薬局等における健康相談も行なわれる現在、保健所のクリニックの果す役割りも例えば、問題児を中心に行なう等、質的にも変ってゆくべきではないでしょうか。

私たちはよく地区住民の need に則した業務にするために地区に対する結びつきが大切であるといわれます。過去の先輩の方々が本当にいい仕事をしてきたといわれる場合も地区に結びついた業務であったようです。そしてそのためには、地区組織を育成し活用してゆくべきだといわれます。しかし都市における地区組織は、土地に定着する意識をもたない単なる集団に過ぎない人々の間では、成り立つこと自体困難な状態です。狭い地域社会にいて個々にバラバラの生活を営んでいる人々、その人たちをつなぐ何ものもないとしたらそのような中で、保健婦はどう働くべきなのでしょう。地区に入っていくために地区組織が活用出来ないとしたら、やはり結核患者乳児あるいは成人病患者等個々の caseをとおして入ってゆくしか方法はないのでしょうか。都市保健婦の働き方として、もっと適切な方法があるように思うのですが……。

勉強できる時間を……

昭和22年に保健所が設置されて、年々人口は増加し業務内容は複雑化しているのに人員はわずかしき増え

いま 保健婦

ていません。

文化の向上マスコミの発達で母親達は新しい知識をつぎつぎと吸収しています。ところが指導する立場の私たちが日々の業務に追われて勉強する時間もなく医学の進歩についていけなくて、昔どおりの保健指導しか出来ないとしたら大きな問題だと思います。現状に甘んじ得ない保健婦ほど現実と理想の違いに悩み苦しんでいるのではないのでしょうか。それは現在の発育が現実とかけ離れた点が多いこと、職場に適切な指導者が少ないために生ずる悩みでもあると思います。

また保健所の人員不足が保健婦にしわ寄せされ業務の窓口がますます広がっていること、保健婦自身も気負いすぎて何でも屋になってしまいがちな傾向があるようです。

地区公衆衛生推進のために、一人保健婦だけでなく

保健所全体が一つにまとまり、市役所、医療機関、その他の組織とがっちり手を組んでそこに地域の人たちが参加していったらどんなに素晴らしいでしょう。それが出来ないのはなぜか、現状をしっかりと見つめたいと思います。

保健婦はどこで働いても目的は同じとはいえ業務内容にかなりの違いのある現在、身分の統一により業務内容を整理されることも必要かと思います。

また保健所業務自体の業務の適切化により、保健婦業務の改善もある程度なされると思います。

先輩保健婦たちが、母子指導員から始まって身分や業務内容を現在までに確立された後を引きついで、今後どの様に発展させてゆくか。

私たちは日々の業務に追われてただ消耗するだけでなく、常に業務についての反省がなされ、長期計画がたてられ、新しい知識や技術を身につける時間をもって余裕のある業務を行なっていきたいと思います。そういう中でこそ私たち一人一人が真剣に考えられるのではないのでしょうか。